精神療法

第36巻　第4号　別刷
2010年 8 月　通巻第179号

● 論説

メタファーと精神療法

小　林　隆　児

Ψ 金剛出版
TOKYO

2010年8月

論 説

メタファーと精神療法

小 林 隆 児*

抄録▶近著で土居（2009）は精神療法の能力向上のためにはメタファーを解することが大切であることを強調しているが，両者がどのような関係にあるのか，書の中では詳しく論じていない。その点を検討することが本稿の目的である。
最初に，メタファーにおいて喩えるものと喩えられるものとの間に共通性を捉えることを可能にしているのが原初的知覚としての力動感 vitality affects であることを指摘するとともに，このような同一視 identification の心の働きと「甘え」が同じ事柄に関わっていることを取り上げ，メタファー，identification，「甘え」などが原初的知覚を通して深く繋がっていることを示した。つぎに，土居が指摘する転移とメタファーの構造の類似性について，自験例を素材にして考察した。そこではふたつの事例を取り上げ，メタファーを用いたり，理解したりすることが治療の重要な転機となることを示した。
メタファーを互いに理解することは，両者間の原初的知覚優位なコミュニケーションである原初的コミュニケーション世界での体験である。精神療法における転移を解するためには，〈患者－治療者〉関係に起こる「甘え」にまつわる心の動きを感じ取ることが求められるが，それは原初的知覚に負うところが大きいゆえ，メタファーを理解することとも相通じる。こうしてメタファーと転移は，原初的知覚を通して互いに深いところで通底しているということができる。筆者は幼児期の養育者との「甘え」をめぐる病理であるアンビヴァレンスの特徴を捉え，それをいかにして緩和するかを治療の焦点に当てているが，それは原初的知覚優位な原初的コミュニケーション世界のことであるゆえ，本稿の主題であるメタファーと精神療法に関する問題とも通底することを示した。

Key words ▶甘え，アンビヴァレンス，メタファー，精神療法，力動感

精神療法，36(4)：517-526，2010

はじめに

土居（2009）が最近の自著の中で，精神科医としてのこれまでの自らの歩みを振り返りながら，自分が一生かけてやってきたことは何かについて率直に語っている（第12章「臨床精神医学の方法論」）。その中で，精神療法がうまくなるためにはメタファー metaphor を解するようになることが重要であることを力説している。しかし，残念なことに，その理由についてこの書ではあまり多くは語られていない。メタファーを解することと精神療法の能力向上がどのように関係しているのであろうか。

土居は「甘え」を鍵概念とすることによって，多様な精神障碍の理解に新たな地平を切り開いたことはつとに知られているが，情動の世界である「甘え」に着目することと土居のこの主張がどのように繋がっているのか，筆者なりに考えてみたいと思い立ったのが本稿を纏めた動機である。

Metaphor and Psychotherapy

＊大正大学人間学部臨床心理学科／くじらホスピタル，Ryuji Kobayashi：Department of Clinical Psychology, Faculty of Human Studies, Taisho University ／ Kujira Hospital

I 土居の主張から

勘繰りを繰り返してきた患者の体験から

土居は先の書の中でこれまでに治療してきた多くの患者の中で印象的であった一人として，勘繰り（土居は妄想を日常語でこのように表現している）を20数年間にわたって一貫して訴え続けていた統合失調症の女性を取り上げ，以下のように語っている。

> ……最近患者がガラッと変わって，勘繰りをしなくなったんです。そして，「先生，もうあんまり考えなくなりました」といって，妄想を訴えなくなったんです。それで，一体どういう心境の変化かと聞いたところ，患者が笑いながら，「お餅が焼く網にくっつくでしょ。そのくっついてる網から餅がはなれたような気持です」とニコニコ笑いながら答えました。この人なんか，一体何が効いたのかわからないし，何もしなくても20年以上付き合ってると治るかもしれない。まあよくわからない。……（中略）……妄想が取れるのをお餅が網から取れるような感じがするというのは，これはすごいmetaphorです。暗喩，たくまざる比喩的表現です。これがわかる人は，精神科の医師としてうまくなると私は思うね。精神療法もうまくなる。metaphorは因果関係じゃないんです。identificationと関係がある。metaphorによって事柄を理解するんですね。たとえば，精神分析的な治療の場合，転移ということをよく聞くでしょう。たとえば子どものときに親との関係の中で起きたことが，長じて，たとえば医者に対して同じことが転移として出てくるという。これはmetaphorなんです。論理構造がmetaphorなんです。ですから，metaphor的な捉え方ができるようになれば，間違いなく，いい精神科の医者になれると思う。……（土居，2009，pp.174-175）

妄想がなくなった心境はどんなものかと尋ねられたこの患者は，おそらくしばし考えてから「お餅が焼く網にくっつくでしょ。そのくっついてる網から餅がはなれたような気持です」と語ったに違いない。なぜなら妄想がなくなった心境など誰もが体験しているものではないし，たとえそのような体験をした者でもその心境をことばにして語っている者などさらに稀有な存在である。これこそまさに唯一無二の患者固有の体験である。そのような体験を他者にどのように伝えるか，それは誰にとっても容易なことではない。

しかし，ここでよく考えてみれば気づくことであるが，そもそも人間にとってあらゆる体験はその人固有の体験であって唯一無二のものである。たとえ同じ場所で同じ（ような）ことをやったとしてもその人にとっての体験はその人独自の固有のものである。しかし，われわれは体験を他者と共有することを目指して，そこでの類似の体験を「ことば」によって共通のものにしていく。

ではそこで共通体験としての「ことば」がどのようにして生まれてくるのか，その過程を明らかにすることが，本稿でとりあげたメタファーの問題と深く関連してくると思われる。

抽象化

先の体験に限らず，われわれの身の回りに存在するさまざまな対象を例にとって考えてみるとすぐにわかることだが，たとえば「すいか」ひとつとっても，スーパーの店頭に並んでいる「すいか」ひとつひとつはすべて色，形，重さなどは異なり，どれひとつとして同じ「すいか」はない。

このようにわれわれの日常世界における事象や対象には，厳密にまったく同一なものは存在せず，各々独自性をもつ。しかし，われわれはそれらの中から何らかの共通性（属性）を取りだして，たとえばそれを「すいか」などと称している。このように似通った事象や対象の共通した一面を取り出してことばで表現する。この種の精神的営みは「抽象化」といわれるものである。このことによって，われわれは（知覚）体験世界を他者に伝え共有することが可能になる。

未分節な体験世界とことばによる分節化

以上述べたように，われわれが個人的に体験する世界は，本来一回性で，独自性をもち，まったく同じ体験を再現することは原理的に不可能である。しかし，われわれは自分固有な体験

であっても，他者のそれと共通な一面を取り出し，「ことば」によって切り分けて記憶することができる。その結果，われわれは自らの体験を他者と理解し合うことが可能になる。本来，体験世界は未分節で独自性の強いものだが，ことばによって体験世界を切り分けることにより，他者と共有することが可能になる。未分節な体験世界はことばによる分節化を通して共同性を有するのである。

identificationと「甘え」

似て非なる日常性の連続の中でのさまざまな体験，事象，対象を同じものだとみなすことをわれわれは普段暗黙裡に行っている。それは同一視identificationというこころの働きである。同一視の最初の体験は乳児が養育者を発見する中で起こる。いつも変わらず相手をしてくれる養育者は次第に自分に無くてはならないものとして浮かび上がり，慣れ親しむようになる。その結果，そこに立ち現われる養育者の存在が乳児にはいつも同じ対象であると実感するようになる。これが精神発達の原初段階での同一視である。このことについて土居は同書で以下のように述べている。

> 先に「甘え」を以て対象関係を代表させたが，この語は語感からすれば親しい関係に伴う情緒を想像させる。これに引きかえidentificationの場合は心の中で起きるある種の動きを指しているのであって，それ自体に情緒を示唆するところはまったくない。この語はふつう同一視とか同一化と訳されることから明らかなように同一を意味する語から派生している。すなわち，同一視ならば同一と認めることであり，同一化ならば相手といわば合体することである。……およそ何らかの対象関係が起きているところではなにがしかの同一化が起きていると想定してさしつかえないのではないか。いや，むしろ同一化によって対象関係が生起すると考えたほうがよいだろう。かくして「甘え」と同一化は概念としてはまったく無関係に見えながら，実は同じ事柄に関わっているということができる。
>
> ……同一視と同一化は同時に働くのであろう。同一視によって対象を認識し，同一化によってその対象と結びつくのである。……（土居，前掲，pp.120-121）

何らかの二つのものが同じであると認識する同一視が起こる際には，対象とのあいだに関係が立ち上がり，そこに「甘え」にまつわる気持ちの動きが働いているというわけである。いつも相手をしてくれる養育者がいつも同じ人（対象）であると認識するときには，そこに「甘え」が生起し，対象と合体しようとするこころの動き，すなわち同一化identificationを伴う。世話を焼いてくれる養育者を同じ対象として認識するというこころの働きには，「甘え」という情動の世界が深く関係しているということである。

Ⅱ　メタファーとidentification

メタファーについて

メタファー（隠喩）は，直喩と並んで修辞法のひとつとされている。直喩は「彼女の足はまるでカモシカのごとし（のようだ）」などの表現のように，喩える対象と喩えられる対象が直接比較され，両者の間に共通の特性が明示される。しかし，メタファーは「時は金なり」などのように，喩えを用いながら，表面的には「～のごとし」「～のようだ」という表現形式をもたない喩え方を指す。このように修辞法とは，その表現を用いる当事者が意識的に用い，比較されている両者間の共通性が一般によく知られていることに特徴がある。

喩えるものと喩えられるものをつなぐ力動感

ここで考えたいのは，先に土居が取り上げた勘繰りを訴え続けた女性の「妄想がなくなったときの心境」とそのメタファーである「くっついている網から餅がはなれたような気持ち」とをつなげているものは何かということである。両者に共通したある感じは，けっして視覚や聴覚といった五感で感じ取ったものではないことは容易に理解できよう。それは，たとえば「刺々しい話し方」と表現されるような，自らの身体そのもので感じ取っているとしか表現しようのないものである。このような感覚や知覚は，これまで無様式知覚amodal perceptionと

か力動感 vitality affects[注)] (Stern, 1985) などといわれてきたもので，人間に本能的に備わっている原初的な知覚である。これはありとあらゆる知覚刺激のリズム，大小，強弱などといった動きを鋭敏に知覚するという特徴を有し，一見すると視覚刺激，聴覚刺激などと別個の知覚刺激であると思われるもの同士の間に通底する何らかの共通性を感じ取って，それらを繋ぎ合わせる役割を果たしている。さらに重要なことは，このような動きの変化はかならずや情動の変化をも同時に生起させるということである。つまりは知覚と情動が共時的に作動しているところにこの原初的知覚の大きな特徴がある。

このことからもわかるように，喩えるものと喩えられるものとのあいだに，同質の力動感が働くことによって，一見するとまったく性質を異にすると思われるものを同一であると認識することが可能になるのである。土居が冒頭の引用文の中で，「metaphor は……identification と関係がある」と指摘しているのは，このことを意味する。つまり，同一視 identification は二つの対象が厳密にまったく同じであると認識することではなく，両者に通底するもの（共通性）があって初めて成り立つ現象なのであって，それを可能にしているのが，原初的知覚だということである。このことはあらゆる事象，対象，現象に対して同一視が起こる際に常に当てはまることである。

Ⅲ 甘えと原初的コミュニケーション

「甘え」と非言語的コミュニケーション

日常，われわれが行っているコミュニケーションは，主に話しことばや身振りを中心とした媒体を介した情報をやりとりする言語的コミュニケーションであるが，その際に中心的役割を果たしている知覚機能は視聴覚である。それに比して「甘え」は話しことばが未だ誕生する以前に生起する情動を中心とした非言語的コミュニケーションの世界である。この非言語的コミュニケーションは，いまだ五感に分化する以前の未分化な知覚，すなわち原初的知覚である力動感 vitality affects や相貌的知覚 physiognomic perception (Werner, 1948) などが活発に働いているところに大きな特徴がある。

ここで断っておきたいことがある。土居 (2009) は「甘え」の世界を非言語的コミュニケーションの世界であると述べているのでここでは彼に倣ったが，これは筆者がこれまで情動的コミュニケーションの世界と称してきたものといってもよい。なぜこれまで筆者は非言語的コミュニケーションと言わなかったかといえば，従来のコミュニケーションの二分類である言語的コミュニケーション verbal communication と非言語的コミュニケーション non-verbal communication は，verbal という語が意味するように，ともに音声言語の有無を基本にした分類であるところに特徴があるからである。非言語的コミュニケーションの代表的なものである身振りや表情は，ともにある種の象徴機能を有しているのであって，それが媒体となって相互のコミュニケーションが可能になっている。しかし，コミュニケーションの原初段階は，いまだ象徴機能を有さない情動が両者間で通底するようにして働いているコミュニケーション世界である。そのような性質の世界で重要な役割を果たしているのが原初的知覚なのである。その意味から原初的コミュニケーションとも称してきたが，このコミュニケーション世界を理解する上できわめて重要なことは，この世界が当事者自身も意識化することが困難なものであるところに大きな特徴があるということである。

もちろん，非言語的コミュニケーションと原初的コミュニケーションは明確に分けることは困難で，両者が明確な境界のない形で重なり合っているともいえるのであるが，ここで強調しておきたいことは，発達の原初段階としてこのような性質のコミュニケーション世界があり，かつそれは人間の生涯発達の過程で一貫して通底するようにして機能しているということである。

注) vitality affects の訳語について：Stern (1985) の翻訳では「生気情動」と訳されているが，筆者は鯨岡 (1999) にならって「力動感」を用いている。その大きな理由は，「生気情動」が日本語として馴染みにくいことと，「力動感」の方がその実態をより忠実に反映していると考えたからである。

原初的コミュニケーションと力動感

先に原初的知覚が働く時には，同時的に情動の変化を伴うと述べたが，実は「甘え」という対人関係の中で立ち上がる情動の動きをわれわれが感知することを可能にしているのも，これまた原初的知覚であるということができる。知覚の一種として捉えた原初的知覚という概念は，その実態としては不可分に情動の変化を伴っているのであって，その時起こっている体験総体を表現するために，これまで筆者は〈知覚－運動－情動〉（Werner，1948）体験と記述してきた。したがって，情動の動きとしての「甘え」も，当事者自身それに気づくことができるのは，原初的知覚によっているのである。

これまで筆者が着目してきた原初的知覚体験なるものと，「甘え」にまつわる体験は，前者は知覚，後者は情動という切り口から捉えたものであって，一見すると性質を異にするもののように思われるかもしれないが，こころの働きとして捉えるならば，両者は実体としては切り分けることのできない共時的かつ同時的な現象だと見なす必要がある。先述したように，土居が「甘え」と identification は概念としてはまったく無関係に見えながら，同じ事柄に関わっていると指摘しているが，「甘え」の世界と原初的知覚体験も深いところで繋がっていることが分かる。

Ⅳ　自験例から

以上，「甘え」と原初的コミュニケーションは原初的知覚によって深く繋がっていることを示してきたが，次に論考を進めるにあたって，ここである事例での印象的なエピソードを取り上げてみよう（小林，2008b）。

A男　5歳

A男は乳幼児期から過敏な子どもで，母親は養育に随分と苦労していた。ことばそのものに目立った遅れはなかったが，身のこなしがぎこちない，視線が合いにくく，なんとなくコミュニケーションがしっくりこないという感じをずっと持ち続けていたという。筆者はある心理相談室の相談員から見立てを求められて診察することになったものである。今日では高機能広汎性発達障碍と診断される事例であった。

A男は遊戯療法室の半分ほどを使って担当セラピストと遊び，筆者は母親面接を残りの空間を使って行っていた。母親はきちんと対面して，こちらの質問に丁寧なことば使いで微に入り細に渡って話をしていた。あまりの緻密すぎる話に，筆者は話に分け入ることが容易ではないなと感じていた。A男の幼い時からの話を聞き始めたが，母親の話は次第に熱のこもったものになっていった。聞いてもらいたいという思いから話しに熱がこもるのは自然の成り行きではあるが，筆者がその時気になったのは，どうも母親には懸命に自分を守ろうと自己弁護しているとでもいえるような，気の張りつめた息苦しさを感じ取ったからである。

その前にA男のこれまでの様子を聞いていく中で，周囲に対してびくびくしながら生活し，母親を頼りにしてきたのではないかと感じたので，そのことを母親に投げかけてみていた。子どもの気持ちそのものについては期待した応答はなかったが，子どもの就学相談の時，学校側から冷たくあしらわれて傷ついた体験があることが語られ始めた。以来，母親はあまり人に頼らず，自分に落ち度がないように，しっかりとしなければという思いになったこともわかった。子どもの気持ちに思いを寄せる余裕が今の母親にはないのであろうかと気になった。

母親は身を乗り出さんばかりにして，目を見開いて，自分の思いを一所懸命に語り続けた。母親のこのような懸命さは子育てにも強く反映していた。A男に対して一挙手一投足にわたって落ち度のないように，つまりは他人様に迷惑がかからないようにと，声かけをしていたのである。

A男は一見するとセラピストに対してサービス精神旺盛に語りかけながら楽しそうに遊んでいたが，実はずっとこちらの面接の様子が気になり，アンテナを張り巡らし，遊びそのものに気持ちが集中していないのが見て取れた。

このように母子ともども痛々しいほどに懸命に生きているのだが，その息苦しさがどこからくるのか，そのことを解き明かしていくことが治療のポイントではないかと想像していた。そ

こでこの面接でなんとか少しでもそのところを和らげることはできないかと考え，母親にこれまでの生き方について肯定的に取り上げ，かつ大変な思いを汲み取りながら，「これまでお母さんは遊びのないハンドルで車を懸命になって運転してこられたように感じますね」と投げかけてみた。母親はまもなく涙ぐみ始め，少し肩の力が抜けたように感じた。

その時であった。それまで母親から離れてセラピストと遊んでいたA男が，急にわれわれが面接している場にボールをはずみで放り投げたのである。われわれは驚き，母親はすぐに注意したが，筆者は注意喚起行動であることをすぐに察知し，A男の気持ちを受け止め，おどけたようにして大袈裟に驚いて見せた。すると，A男が母親の傍に寄ってきてまとわりつき始めたのである。

「あいだ」で感じられた力動感とメタファー

母親との面接の中で感じ取ったことを「これまでお母さんは遊びのないハンドルで車を懸命になって運転してこられたように感じますね」と筆者は表現して，母親に投げ返している。これはまさにメタファーそのものである。それを可能にしてくれているのは原初的知覚であることはいうまでもないが，筆者にとって大きな驚きであったのは，このようにメタファー的なことばを投げ返した直後，A男がなかば意図的にこちらにボールを投げてわれわれの注意を喚起し，筆者がそれに応じたことをきっかけにして母親にまとわりつき始めたことであった。このようなA男の行動が引き起こされる契機となったのは，筆者のメタファー的表現によって母親のそれまでの対人的な構えが緩んだことであったが，それによってA男は母親に急速に近づきやすく感じとったのであろう。つまりは甘えやすくなったのだ。このことを面接の中で筆者はアクチュアルに感じとったが，その際母親の感情も高揚したであろうことが母親の紅潮し涙した表情にも感じ取れたのである。

このように面接で被面接者と面接者との「あいだ」に立ち上がる気持ち（情動）の動きを感じ取る作業は，「甘え」の世界でのこころの動きそのものともいえようが，この感じ取る作業を可能にしているのが原初的知覚なのである。

面接当初母親の話を聞きながらある種の息苦しさとでも言ってよいものを筆者は感じ取っていたが，そのように感じ取っている時に子どもは母親に近づくことを躊躇している。「甘えたくても甘えられない」心的状態にあるのだ。A男はセラピストと一緒に遊んでいるようで，実は母親の存在が気になってとても遊びに集中できるような状態ではなく，アンテナはいつも母親のほうに張り巡らしていることは，担当していたセラピスト自ら感じ取っていたことでもあった。

自分が話し相手に入り込む余地などないように感じられる時には，相手に接近するという「甘えたい」気持ちにはなれないものだが，このような感じを抱く時には子どもは母親に「甘えたくても甘えられない」アンビヴァレントな心理状態になるであろうことは容易に想像できる。

つぎに取り上げるのは，筆者が以前嘱託医として関与していた成人期自閉症者入所施設で当時職員として自閉症者に療育的関わりをもった斉藤（2005）の報告からの引用である。筆者は主治医として治療を担当していたものである。

G男　青年期　最重度精神遅滞

施設に入所中の自閉症男性であるが，入所当初はこだわり，自傷，他害などの激しい行動障碍を呈していた。入所後のG男に対する療育は困難を極め，職員である斉藤は満身創痍といえるほどにG男の行動障碍による怪我が絶えなかったが，G男とのコミュニケーションも暗中模索の状態にあった。しかし，いろいろとG男の生活の様子を観察する中で少しずつ彼女はG男の言動の意味を感じとれるようになっていった。以下のエピソードはそのころのものである。原文に沿って「です，ます」調で記述する。

個別の散歩を始めてから，特に女性職員に対して徐々に自分から接して行くことが増えてき

ました。最初は腕を触るくらいだったのが，髪の毛を引っ張ったり，つばをかけたり，頬を触ったり，こちらが嫌がるそぶりをみせると，ますます喜んで追いかけてくるようになりました。散歩中も，私が離れて歩いたり，歩きながら考え事などをしていると突然大声を出しました。それは自分のほうへ関心を向けてほしい，そんな彼なりの表現でした。遊んで欲しくてたまらない，そんなふうにも見えました。ただ，そんな時にわざわざ人の嫌がることをして表現してくるため，彼の意図をよりわかりにくく，伝わりにくくしてしまうのだと感じました。

彼から出てくる言葉にも変化が見られるようになりました。女性職員の頬を触るとき，人によって触りながら出す言葉が違うのです。私の時には「ポコポコ」，別の職員の時には「ケーンケン」というように，です。また，人を名前で呼ぶのではなく，彼のイメージするものに当てはめて呼んだりもしました。たとえば，ツル，クレーン車，シロクマなどのようにです。また，職員のことを表現するときに，その職員の名前を知っているのに，過去に彼に関わったことのある先生の名を使って表現するのでした。たとえば，ある職員に怒られると，「○○せんせいにおこられた～」と，養護学校時代に関わった，彼にとってはあまりよいイメージでない先生の名前を出して騒ぐのです。このような彼独特の表現に気付いてから，彼の言葉の世界が少しずつ見えてきました。また彼と話をするとき，できるだけ言葉を多く用いずに，彼の口調やイントネーションをまねて伝えると，私たちが普段使う言葉をそのままの口調で伝えるよりもずっと伝わりやすいことにも気付きました。彼の用いる言葉が何を指し示し，過去のどのような場面や気持ちの時に使われたのかを，母親から聞いたり養護学校時代の先生からエピソードを聞いたりして断片的にでも理解できるようになってきました。彼の言葉は，今現在の彼の気持ちが，過去に体験したある場面での気持ちと似たような気持ちになったときに，その過去の場面を象徴的に表現していることがわかってきたのでした。

たとえばこんなエピソードがあります。G男さんが大声で「もぶ（もう）ごまおさつしまっといてぇ～！」「クレーン車，のってけ，もぉ～っ！！」と，とても怖い顔をして何度も繰り返し叫んでいました。この「ごまおさつ」という表現は，とても機嫌の悪いときにだけ使われます。実はこの「ごまおさつ」は冷凍食品の名前なのですが，彼が養護学校の高等部の時，ずっと登校拒否をしており，そのころの担任の先生が毎日彼を迎えにきていました。その際，彼はかならずこの「ごまおさつ」をひとつトースターで温めて食べてからしぶしぶ出かけて行っていたというのです。その時の気持ちと似たような感情が沸いてきたときに，どうやらこの「ごまおさつ」という表現を使うようなのです。ですからこの言葉が出た時点で何かがあったことはすぐにわかりました。その後の「クレーン車」で，これが誰を指し示しているのかがわかったため，その職員に事情を聞いてみると，どうやらG男さんはなにか注意をうけたようです。そこで，「そんなことしちゃだめだよね」と話すのではなく，「そっかー，ごまおさつだねー。嫌だったねー。クレーン車におこられちゃったね。でももうしないね」というように伝えると，じっと聞いていて，「しないね」と答えるのです。こちらが「(クレーン車と呼ばれている）～さんに謝りにいくね」と言うと，「いくね」と答えてその職員のいるほうへ歩き出しました。よくわかっているのだなあと，改めて感じました。何もかもこちらの言葉で話すよりも，彼の表現も借りながら，そしてこちらの言葉で返しながら話をする，そんなコミュニケーション方法に，なんとなく手応えを感じられるようになってきたのでした。

またG男さんは，私たちにはわからない意味不明な言葉に対して「それ何？」と聞き返すととても嫌な顔をしました。そしてわからない私たちのほうがおかしい，とでもいうような顔をするのです。本人はもう十分伝えているつもりなのです。ですから彼の発する言葉の意味そのものよりも，「いやなんだよ」とか，「うれしいよ」など，ことばにのせられて届く，彼の気持ちを受けとめるようこころがけました。たとえば「そっか，ごまおさつだね」という言葉は，私の中では，ごまおさつという物を理解しているというよりもむしろ，「いやなんだというG男君の気持ち，よくわかったよ」という返事のようなものでした。「け～ちゃん」ということばは，私にとっては特に嬉しいことばではないのですが，彼が嬉しそうに「け～ちゃん」と言ってきた時に，同じように「け～ちゃん」と言い返し

てあげるととても嬉しそうな顔をするのです。そしてそんな彼と言葉をかけあっているときには，私もとても嬉しい気持ちになります。言葉というものがこの時点ではまだ，私たちが普段あたりまえのように話をするときに用いる言葉とは違う意味合いを持っていたように思います。言葉そのものの意味よりもむしろ，言葉に乗せられて届くお互いの気持ちのやりとり，という意味合いが強く，こんな彼独特の言葉（表現）を用いながら，時間をかけて繰り返し積み重ねていました。

「ごまおさつ」とメタファー

G男がさかんに発している一見意味不明な「ごまおさつ」が，彼の不登校時代のつらい体験に基づいたものであることが経過の中で次第に明らかになっているが，ここでG男は意図的に用いているわけではないにもかかわらず，表現のあり方としては「ごまおさつ」はまさにメタファーと称してよいものである。

Kanner（1946）はメタファー的言語 metaphorical language を自閉症の言語病理の特徴のひとつとして取り上げて論じている。通常の言語的コミュニケーションでは，比喩するものと比喩されるものは，当然聞く人に了解可能であることが期待されて用いられるが，自閉症児の場合，子どもの特殊な個人的経験に基づいた比喩的表現で，そのことばを初めて聞いた，あるいは使い始めた出来事を直接観察するか想起しなければ理解は不可能であるところに特徴があると指摘している。

ここで注目してほしいのは，A男において筆者が表現したことばは意図的なものであるのでまさにメタファーであるのに比して，G男が発した表現は意図的に用いたとは考えにくく，思わず口にしたものと思われるが，それが実際にはメタファーと同じ構造をもつ言語表現になっていることである。

なぜ斉藤はその意味を理解することができたのかといえば，G男の母親から彼の生活史を聞き，「ごまおさつ」が不登校時代の担任の迎えによってしぶしぶ登校を余儀なくされた当時の思いを象徴していることがわかったからである。「ごまおさつ」に象徴されている不登校時代のつらかった気持ちと今体験している気持ちが同じような思いであることが示されているが，ここに「ごまおさつ」という表現がメタファーと称してもよい理由がある。このことは，現にG男が「ごまおさつ」と発する時の気持ちを察して「嫌なのね」と斉藤が応じることによって，G男は自分の気持ちがわかってもらえたという満足した表情を見せていることから明らかになったともいってよい。

このようなコミュニケーションを可能にしているのは，「ごまおさつ」と発することばのもつ力動感やそのときのG男の思いを斉藤が感じ取っていることによっている。ここでも原初的知覚が大きな役割を果たしているが，そこにはG男の生活史が濃厚に反映しているのである。

V　メタファーと精神療法

転移とメタファー

メタファーを解することが精神療法の能力向上に大切であるとの土居の主張の眼目は，転移の構造そのものがメタファーと同じだというところにある。土居は治療関係の中で起こっている患者の気持ちの動きを感じ取る過程がメタファーを解する過程と同じ構造をもつという。幼児期に親との間に起こっていた患者の気持ちの動きと，同じような気持ちの動きが現在の治療者との間にも起きている。ではその両者間に生じる共通のものを感じ取るにはどうしたらよいか。このことを可能にしているのが実は原初的知覚，つまりは力動感だと思われる。さらに重要なことは，ここでいう気持ちの動きとは，気持ち一般を指すのではなく，「甘え」にまつわる情動の変化だというところにある。なぜなら「甘え」にかかわる情動の動きはすべて対象指向性をもつゆえ，そこに必然的に対人関係のありようが想起されるからである。

メタファーと原初的コミュニケーション

以上のことから明らかなように，メタファーは，一見すると互いにまったく異なったものであるにもかかわらず，原初的知覚の働きによって両者間のある種の共通性を捉えて表現された

ものである。したがって，治療者と患者との間でメタファーの共通理解が生まれるということは，原初的知覚の働きに負うところが大きいのであって，そこには結果的にではあるが原初的コミュニケーション世界での深い繋がりが生まれていることを暗に示しているということもできる。「甘え」にまつわる知覚体験とはそのような性質を持っている。それゆえに，原初的知覚は，他者のこころの動きを感じ取る上できわめて重要な役割を果たしているといえるのである。

identificationと力動感

土居は先の書（2009）でとりわけ「甘え」とidentificationの関係について多くの紙幅を割いて論じている。その中でも印象的な箇所をひとつ取り上げてみよう。

> ……「甘え」が起きているときには，identificationも起きていると考えることができる。甘える人と甘えられる人とは相互に自分自身についてそしてまた相手に対してidentificationを起こしているんです。……ところで医者と患者の間に治療関係ができるときは，2人の間にidentificationが起きてくるんです。あんまり起きるとfolie à deuxみたいになっちゃうから，そうならないようにしなくてはいけないんだけれども，そこのところが精神療法の一番の味噌だろうと思います。……医者が医者として患者と人間的に付き合う場合どこかで融合が起きるというのは，まず間違いないですね。精神療法というのはまさにそのことを治療的に役立てることなのです（土居，前掲，pp.172-173）。

筆者が常々強調してきた原初的知覚は，自他融合的世界における知覚体験様式であるが（小林，1993），このことはまさに土居のいうところの「医者と患者の間に融合が起きる」際の体験様式そのものを指している。他者の気持ちの動きそのものを自らのものとして感じ取り（ここでのこころの動きが同一化といわれているものである），それをいかにして治療関係の中で相手に投げ返していくか，そのところに精神療法の勘所があるのではないか。土居はそのことを述べているように思われるのである。

ここで他者の気持ちの動きと述べたのは，単に喜怒哀楽といった他者の感情を指しているのではないことは再度強調しておく必要がある。土居はなぜ「甘え」がidentificationと深く関係していると述べたかといえば，相互の気持ちの動きが「甘え」といわれる他者に対していだく情動に深く関係したものだからである。そのような情動の動きはわれわれ日本人には身体を通して体験的にとてもよくわかるゆえに，相手の気持ちの動き，つまりはこちらに対して起きている「甘え」にまつわる感情を感じ取ることが精神療法においてとりわけ大切だというのであろう。このような相手の気持ち（甘え）の動きを感じ取るところにはidentificationが起こっているとみなすことができるのである。

おわりに

土居の『臨床精神医学の方法』（2009）は今では遺書となったが，そこで筆者の心に強く響いたのが「メタファーと精神療法との関係」を論じた個所であった。そこで本稿ではこの両者の関係について，関係発達臨床の立場から論じた。

これまで筆者は自閉症を主な対象として関係発達臨床の実践を積み重ねてきた。その中で，自閉症とみなされる行動特徴が出現していく背景には，人間が生まれてまもなく体験する〈子－養育者〉関係という原初段階での対人関係の形成過程において，子どもが養育者に対して抱く関係欲求（甘え）をめぐるアンビヴァレンスによって両者の関係にさまざまな歪みが生じ，その上に関わり合いが積み重ねられていく。このことがのちのち子どもたちに自閉症に特徴的とされる多様な症状（障碍）や行動上の問題をもたらしていくことを論じてきた（小林，2008a；2010a；小林・原田，2008）。

「甘え」は乳幼児（のみならず人間）にみられる本能的で原初的な情動であるが，「甘え」は相手があって初めて実現するものであるゆえ，そこには必然的にアンビヴァレンスを生む素地を孕んでいる。このアンビヴァレンスは〈子－

養育者〉関係の成立をめぐってさまざまな困難をもたらし，"関係障碍を生み出しやすい。それは基本的信頼感に関わる深刻な問題と関連するゆえ，人間の生涯発達全般にわたって強い影響を及ぼすことになる。

このことからも，関係欲求をめぐるアンビヴァレンスの問題は，自閉症を初めとした発達障碍にのみ当てはまるものではなく，あらゆるこころの問題に深く関係した問題だということができる（小林，2010b）。土居（2009）がアンビヴァレンスの問題を中核に据えて論じていることに，筆者は強い共感をもつゆえ，本稿を纏めた次第である。

文　献

土居健郎（2009）臨床精神医学の方法．岩崎学術出版社．

Kanner L（1946）Irrelevant and metaphorical language in early infantile autism. Childhood Psychosis : Initial studies and new insights. pp.45-50, John Willey & Sons.

小林隆児（1993）自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理．精神科治療学 8(3)：305-313

小林隆児（2008a）よくわかる自閉症―関係発達からのアプローチ．法研．

小林隆児（2008b）自閉症のこころの問題にせまる．そだちの科学 11：2-9

小林隆児（2010a）自閉症のこころをみつめる―関係発達臨床からみた親子のそだち．岩崎学術出版社．

小林隆児（2010b）関係からみた発達障碍．金剛出版．

小林隆児・原田理歩（2008）自閉症とこころの臨床―行動の「障碍」から行動による「表現」へ．岩崎学術出版社．

鯨岡峻（1999）関係発達論の構築―間主観的アプローチによる．ミネルヴァ書房．

斉藤（原田）理歩（2005）日々積み重ねていくもの．（小林隆児・鯨岡峻編著）自閉症の関係発達臨床．日本評論社．

Stern D（1985）The Interpersonal World of the Infant : A view from psychoanalysis and developmental psychology. Basic Books.（小此木啓吾・丸田俊彦監訳，神庭靖子・神庭重信訳（1989／1991）乳児の対人世界　理論編／臨床編．岩崎学術出版社）

Werner H（1948）Comparative Psychology of Mental Development. International University Press.（鯨岡峻・浜田寿美男訳（1976）発達心理学入門．ミネルヴァ書房）